PRACTICAL HANDBOOKS

肝疾患治療ハンドブック

重庆医科大学第一医院
图书室
二九九三年四月廿二日

重庆医科大学第一医院
图书馆

PRACTICAL HANDBOOKS

肝疾患治療ハンドブック

●編集
山梨医科大学教授　鈴木　宏
旭川医科大学教授　水戸廸郎

0012 3815

南江堂

R575/L843
116

CF9105/40
肝病治療実用手册
(日5-4/6)
C—012.90
ISBN (4-524-24473-5)

肝疾患治療ハンドブック　　定価 9,800 円
(本体 9,515 円・税 285 円)
244731

1989年7月10日　発行　　ISBN 4-524-24473-5

編　者 ● 鈴木　宏，水戸廸郎
発行者 ● 小立　淳
発行所 ● 株式会社　南江堂
本店　〒113 東京都文京区本郷三丁目42番6号　☎出版部(03)811-7236(代)
☎営業部(03)811-7239(代)・振替東京2-149
支店　〒604 京都市中京区寺町通御池南　☎ (075) 221-7841 (代)・振替京都9-5050
印刷・製本 ● 横山/石毛

© Hiroshi Suzuki, Michio Mito, 1989

乱丁・落丁の場合はおとりかえいたします。　Printed and Bound in Japan

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製（コピー）することは，法律で認められた場合を除き，著作者および出版社の権利の侵害となりますので，その場合にはあらかじめ小社あて許諾を求めてください。

執筆者（執筆順）

藤澤　洌	Kiyoshi Fujisawa	東京慈恵会医科大学第一内科教授
鈴木　宏	Hiroshi Suzuki	山梨医科大学第一内科教授
井上恭一	Kyoichi Inoue	富山医科薬科大学第三内科助教授
上村朝輝	Tomoteru Kamimura	新潟大学第三内科助教授
市田文弘	Fumihiro Ichida	新潟大学名誉教授
飯野四郎	Shiro Iino	東京大学第一内科講師
森敬一郎	Keiichiro Mori	京都大学第二外科
嶌原康行	Yasuyuki Shimahara	京都大学第二外科
小澤和恵	Kazue Ozawa	京都大学第二外科教授
水本龍二	Ryuji Mizumoto	三重大学第一外科教授
野口　孝	Takashi Noguchi	三重大学第一外科助教授
小林健一	Kenichi Kobayashi	東京慈恵会医科大学麻酔科教授
水戸廸郎	Michio Mito	旭川医科大学第二外科教授
草野満夫	Mitsuo Kusano	旭川医科大学第二外科講師
葛西眞一	Shinichi Kasai	旭川医科大学第二外科講師
櫛部　朗	Akira Kushibe	旭川医科大学第二外科
古田精市	Seiichi Furuta	信州大学第二内科教授
兼高達貳	Tatsuji Kanetaka	東京逓信病院消化器科部長
佐藤博之	Hiroyuki Sato	金沢医科大学消化器内科講師
高田　昭	Akira Takada	金沢医科大学消化器内科教授
平澤博之	Hiroyuki Hirasawa	千葉大学救急部・集中治療部助教授
菅井桂雄	Takao Sugai	千葉大学救急部・集中治療部講師
大竹喜雄	Yoshio Otake	千葉大学救急部・集中治療部
武藤泰敏	Yasutoshi Muto	岐阜大学第一内科教授
杉原潤一	Junichi Sugihara	岐阜大学第一内科
藤原研司	Kenji Fujiwara	東京大学第一内科講師
富谷智明	Tomoaki Tomiya	東京大学第一内科
白木和夫	Kazuo Shiraki	鳥取大学小児科教授
瀧野辰郎	Tatsuro Takino	元京都府立医科大学第三内科教授
奥野忠雄	Tadao Okuno	明石市立市民病院内科部長

進藤道子	Michiko Shindo	京都府立医科大学第三内科
谷内　昭	Akira Yachi	札幌医科大学第一内科教授
菅　充生	Mitsuo Suga	札幌医科大学第一内科講師
矢野右人	Michitami Yano	国立長崎中央病院臨床研究部長
溝口靖紘	Yasuhiro Mizoguchi	大阪市立大学第三内科助教授
佐藤俊一	Shunichi Sato	岩手医科大学第一内科教授
柏原紀文	Toshifumi Kashiwabara	岩手医科大学第一内科講師
増山仁徳	Hironori Masuyama	獨協医科大学第二内科講師
石田基雄	Motoo Ishida	獨協医科大学第二内科
原田　尚	Takashi Harada	獨協医科大学第二内科教授
前沢秀憲	Hidenori Maezawa	東京医科歯科大学第三内科教授
宮野龍美	Tatsumi Miyano	東京都職員共済組合青山病院内科
辻井　正	Tadasu Tsujii	奈良県立医科大学第三内科教授
植村正人	Masahito Uemura	奈良県立医科大学第三内科
渡辺明治	Akiharu Watanabe	岡山大学第一内科助教授
竹平安則	Yasunori Takehira	県西部浜松医療センター消化器科診療科部長
金井弘一	Koichi Kanai	東芝中央病院院長
三條健昌	Kensho Sanjo	東京大学第二外科講師
出月康夫	Yasuo Idezuki	東京大学第二外科教授
奥村英正	Hidemasa Okumura	日本医科大学第一内科教授
大須賀勝	Masaru Osuga	日本医科大学第一内科
谷川久一	Kyuichi Tanikawa	久留米大学第二内科教授
豊永　純	Atsushi Toyonaga	久留米大学第二内科助教授
杉浦光雄	Mitsuo Sugiura	元順天堂大学第二外科教授
二川俊二	Shunji Futagawa	順天堂大学第二外科教授
恩田昌彦	Masahiko Onda	日本医科大学第一外科教授
田尻　孝	Takashi Tajiri	日本医科大学第一外科講師
石井裕正	Hiromasa Ishii	慶應義塾大学内科助教授
高橋久雄	Hisao Takahashi	慶應義塾大学内科
関谷千尋	Chihiro Sekiya	旭川医科大学第三内科講師
黒田博之	Hiroyuki Kuroda	順天堂大学消化器内科講師
吉田和朗	Kazuro Yoshida	順天堂大学消化器内科
浪久利彦	Toshihiko Namihisa	順天堂大学名誉教授
蓮村　靖	Yasushi Hasumura	東京医科歯科大学第二内科助教授
大宮司有一	Yuichi Daiguji	東京医科歯科大学第二内科
武内重五郎	Jugoro Takeuchi	東京医科歯科大学名誉教授
佐々木博	Hiroshi Sasaki	富山医科薬科大学副学長
岡　博	Hiroshi Oka	東京警察病院院長
内野純一	Junichi Uchino	北海道大学第一外科教授

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

円谷敏彦	Toshihiko Tsuburaya	北海道大学輸血部講師
佐藤直樹	Naoki Sato	北海道大学第一外科
高田忠敬	Tadahiro Takada	帝京大学第一外科助教授
田中　慧	Satoshi Tanaka	東京都立駒込病院内科医長
林　星舟	Seishu Hayashi	東京都立駒込病院内科
土屋凉一	Ryoichi Tsuchiya	長崎大学第二外科教授
瀬川　徹	Toru Segawa	長崎大学第二外科講師
小林健一	Kenichi Kobayashi	金沢大学第一内科助教授
服部　信	Nobu Hattori	金沢大学第一内科教授
大藤正雄	Masao Ohto	千葉大学第一内科教授
磯村伸治	Shinji Isomura	昭和大学附属豊州病院消化器科
江原正明	Masaaki Ehara	千葉大学第一内科
三浦　健	Tsuyoshi Miura	半蔵門病院外科部長
岡本英三	Eizo Okamoto	兵庫医科大学第一外科教授
山中若樹	Naoki Yamanaka	兵庫医科大学第一外科講師
中山和道	Toshimichi Nakayama	久留米大学第二外科教授
才津秀樹	Hideki Saitsu	久留米大学第二外科
嘉村好峰	Yoshimine Kamura	久留米大学第二外科

序　文

医師の診療行為とその効果，言い換えれば病気の経過，患者さんの予後を簡単に数式で表示するならば，次の式となるであろう．

$$Z(\text{効果，診療成果}) = -\underbrace{|aX_1 + bX_2 + \cdots\cdots|}_{\text{(総合的診断による病態)}} + \underbrace{|\alpha Y_1 + \beta Y_2 + \cdots\cdots|}_{\text{(集学的治療の効果)}}$$

X_1，X_2……は各種診断手法

Y_1，Y_2……は各種治療手段

a，b……および α，β……はそれぞれの信頼係数

効果Zがプラスなら疾患からの快復ないしは軽快，マイナスの場合は悪化ないしは不幸の転帰を意味する．

肝臓の疾患に悩む人々は昭和40年代から60年代では約9倍に増え，また，成人病の死因順位としては，肝疾患は悪性新生物，脳血管疾患，心疾患に次いで4位に位置するようになった．

肝疾患の診療は，昭和50年代前半までは，腫瘍，膿瘍などの限局性疾患の治療と，びまん性疾患に対しては例外的に合併症である食道静脈瘤破裂などへの対応などが外科医にゆだねられる以外は，診断も治療も主として内科医によって行われてきた．しかし，昭和50年代前半までの診療の実態を1,000頁前後に及ぶ名著といわれる肝臓の専門書でみると，内容の大半は病態の説明で，治療にさかれる頁数は僅か3%前後にすぎない．記述された内科治療の主体は，安静，食事療法で，各種ビタミン剤と利尿剤，副腎皮質ホルモンが加わる程度で，病(やまい)を患者自らが治す，すなわち侵された肝の再生力に静かに期待する古典的治療の域を脱していなかった．しかも病態の把握も肝炎ウイルスの存在を推定する程度では当然 a，b……などの信頼係数は低く，的確なものとは言えない状況であった．また外科治療も術前の肝予備力の評価の信頼係数が低く，それに対応する肝切除の適用は，時として，鹿を追う猟師山を見ずの譬(たとえ)を思わせるマイナスの効果となった．

1965年以降の肝炎ウイルスの発見，α-fetoproteinのRI法の確立，超音波，CT，NMRなどのME診断機器の開発と普及，血管カテーテル法の診断手法から治療手段への応用，ワクチンの開発など，診断・治療の飛躍的進歩は，a，b……および α，β……などの信頼係数を高め，また，治療行為が内科・外科の枠を越え，正に集学的治療が行われる昨今となった．同時に肝疾患に関する文献は医学雑誌にあふれ，本邦で発刊された専門書は約80を数える情報過多の時代となった．一見望ましい状況下にあるように思われるが，日常の診療に多忙な医師は，洪水の如き情報の選別に時を費やすことはできない．しかし，一方では，病態に対応した信頼係数のより高い治療手段の適応を常日頃渇望していることも事実である．

本書は，すでに刊行された『肝疾患診断ハンドブック』に対応した『肝疾患治療ハンドブック』として企画された．豊富な肝疾患の治療知見と数多くの最新情報とをすでに整理統合されている専門家の方々に，その統合された情報を日常の治療にいかに利用して効果をあげているか簡潔明確に記載していただいた．

前半Ⅰ～Ⅲ章は，内科・外科を問わず，肝疾患の治療に必要な基本的事項とした．Ⅳ～Ⅷ章は，各論的な内容とした．いずれも理解を容易にするために図と表を駆使し，簡潔な文章で，しかも信頼係数を主点に具体的に記述していただいた．そのことによって，診療の合間にも目を通せる，文字通りのHandbook，携帯書，手引書となったと信ずる．本書によって肝疾患治療の現場で悩む医師と病に悩める人々に福音がもたらされることをひそかに期待するものである．

1989年5月

編　者

目　次

I. 肝疾患のプライマリーケア

1. 肝障害度に対応した安静度 ――2
A 臥床安静の必要性 ……2
B 急性ウイルス肝炎 ……2
C 慢性肝炎 ……3
D 肝 硬 変 ……3
〔藤澤　洌〕

2. 肝障害時の食事療法 ――5
A 食事療法の目的と意義 ……5
B 急性肝炎 ……5
C 慢性肝炎 ……5
D 脂 肪 肝 ……7
1 肥満に伴う脂肪肝 ……8
2 糖尿病性脂肪肝 ……8
3 アルコール性脂肪肝 ……8
4 アルコール性肝疾患 ……8
E 肝硬変(非アルコール性) ……10
〔藤澤　洌〕

3. 病態に応じた肝臓薬の使い方 ――11
A 肝の病態と肝疾患 ……11
1 肝細胞障害 ……12
2 肝機能障害 ……12
3 間葉系の反応 ……12
4 胆汁うっ滞 ……12
5 限局性肝障害 ……12
6 黄　疸 ……12
B 肝臓薬の効果について ……13
C 薬剤治療の考え方 ……15
1 急性肝細胞障害 ……15
2 急性肝内胆汁うっ滞 ……16
3 慢性肝炎 ……16
4 肝硬変 ……17
〔鈴木　宏〕

4. ステロイド剤の肝疾患への適応 ――19
A 副腎皮質ステロイド剤の種類と作用機序 ……19
B 適 応 症 ……19
1 急性ウイルス性肝炎 ……19
2 劇症肝炎 ……21
3 慢性肝炎 ……21
4 肝硬変 ……22
5 肝内胆汁うっ滞 ……22
6 アルコール性肝障害 ……23
C 投 与 法 ……23
1 短期大量投与法 ……23
2 漸減投与法 ……23
3 間欠投与法 ……23
4 隔日投与法 ……24
5 他の免疫抑制剤との併用投与法 ……24
D 副作用の防止 ……24
〔井上恭一〕

II. ウイルス肝炎の予防

1. A型肝炎の予防 ―――――28
A A型肝炎ウイルスとウイルスマーカー ……28
1 A型肝炎ウイルス ……28
2 A型肝炎ウイルスマーカー ……28
B A型肝炎の発生頻度 ……29
C 感染経路 ……29
D 日本人のHA抗体保有率 ……30
E 予　防 ……30
1 一般的予防対策 ……30
2 消毒剤 ……30
3 ヒト免疫グロブリンによる予防 …31
4 A型肝炎流行時の対策 ……31
5 海外出張・駐在における予防 ……31
6 A型肝炎ワクチン ……31
〔上村朝輝，市田文弘〕

2. B型肝炎の予防 ―――――33
A B型肝炎ウイルス感染の実態 ……33
1 予防を考えるうえでのB型肝炎ウイルス ……33
2 母子感染 ……34
3 水平感染 ……34
B B型肝炎ウイルス感染予防 ……36
1 一般的な感染予防 ……36
2 特異的な感染予防 ……38
〔飯野四郎〕

III. 肝臓外科に必要な基本的知識

1. 肝予備力からみた外科的治療法の選択 ―――――44
A 肝予備力評価法の変遷 ……44
1 Childの分類 ……45
B indocyanine green (ICG)排泄機能検査 ……45
C その他の肝機能検査 ……45
D 多変量解析による肝予備力判定 ……46
E 肝予備力の本態は何か ……46
F チトクロームa (+a_3)量と耐糖能異常 ……47
G redox tolerance test―血中ケトン体比による肝予備力評価 ……48
H 手術侵襲の定量化 ……50
I 術後肝予備力と術後管理―redox理論 ……51
J 手術適応の決定に当たって ……52
K 肝予備力に基づいた手術適応の決定 53
〔森敬一郎，嶌原康行，小澤和恵〕

2. 肝切除の術前・術後管理の基本 ―――56
A 肝切除後の合併症 ……56
1 肝切除手技に直接関連する合併症 56
2 重要臓器障害 ……57
B 術前管理の要点と対策 ……58
1 術前のチェック ……58
2 術前処置 ……62
C 術中管理 ……63
D 術後管理 ……63
1 術後早期の管理 ……63
2 術後後期の管理 ……64
〔水本龍二，野口　孝〕

3. 肝疾患と麻酔法の選択 ―――――66
A 麻酔に関連した肝機能 ……66
1 肝血流 ……66
2 肝代謝 ……67
3 肝機能検査 ……69
B ハロセン肝炎について ……70
C 肝機能障害例の麻酔上の注意 ……70

D 特に劇症肝不全について ……70
E halothane 使用についての注意 ……71
〔小林建一〕

4. 肝切除術の基本手技 ——72
A 肝臓手術に必要な手術器具，縫合糸，止血材料など ……72
B 皮膚切開 ……72
1 右肋骨弓下切開 ……72
2 上腹部正中切開 ……73
3 胸骨縦切開 ……73
4 右第8肋間切開 ……73
C 止血，肝縫合 ……74
1 止　血 ……74
2 肝縫合 ……74
D 肝門部血行遮断 ……74
1 Pringle 法 ……74
2 血管鉗子による肝門部血行遮断 …74
3 一側肝葉の血行遮断 ……75
4 臍静脈からのバルーンカテーテルによる門脈枝の一時遮断 ……75
E 肝の授動 ……78
1 術中検索のための肝の授動 —肝間膜の切離 ……78
2 肝右葉の授動 ……78
3 肝左葉の授動 ……78
F 主な肝の手術手技 ……78
1 肝嚢胞の手術 ……78
2 肝切除術 ……80
G ドレナージ，閉腹 ……87
〔水戸廸郎，草野満夫〕

5. 止血法—止血剤の有効性と新しい手術機器の有用性 ——88
A 止 血 剤 ……88
1 従来の局所止血剤 ……88
2 微線維性コラーゲン止血剤 ……89
B 新しい手術機器 ……89
1 マイクロ波コアギュレータ ……89
2 超音波メス ……90
3 レーザーメス ……91
4 赤外線コアギュレータ(I.C.C.) ……92
〔葛西眞一，櫛部　朗，水戸廸郎〕

IV. 急性肝疾患の治療

1. 急性ウイルス肝炎 ——96
A 急性ウイルス肝炎の型別診断 ……96
1 A型肝炎 ……97
2 B型肝炎 ……97
3 非A非B型肝炎 ……97
B 肝炎重症化の判断の手がかり ……97
1 肝障害の重症度の判定 ……97
2 合併症による重篤化 ……98
C 急性期の治療 ……98
1 安静療法 ……99
2 食事療法 ……99
3 薬物療法 ……99
D 回復期の治療 ……100
1 安静療法 ……100
2 食事療法 ……100
3 薬物療法 ……101
〔古田精市〕

2. 薬剤による肝障害 ——103
A 診断のための薬剤の知識 ……103
1 肝障害を起こす頻度の高い薬剤 …103
2 特殊な型の肝障害 ……105
B 診断手順と初期の処置 ……105
C 治　療 ……105
1 安　静 ……105
2 食　事 ……106
3 薬　剤 ……106
〔兼高達貳〕

3. アルコール性肝炎 ——107
A アルコール性肝炎の概念と診断 ……107

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

B アルコール性肝炎の治療 ……109
1 一般的療法 ……110
2 随伴病態に対する治療 ……110
3 薬物療法 ……111
4 全身管理 ……113
〔佐藤博之，高田　昭〕

4a. 劇症肝炎—全身管理のあり方 ——115
A 中枢神経に対する対策 ……116
B 心に対する対策 ……116
C 肺に対する対策 ……116
D 腎に対する対策 ……117
E 栄養，補液 ……117
F 出血傾向及びDIC対策 ……119
G 感染症対策 ……120
H MOFの対策 ……121
〔平澤博之，菅井桂雄，大竹喜雄〕

4b. 劇症肝炎—薬物療法の実際 ——124
A 劇症肝炎の診断 ……124
B 劇症化の予知と対策 ……125
C 劇症肝炎の薬物療法 ……127
1 特殊療法 ……128
2 合併症に対する薬物療法 ……131
〔武藤泰敏，杉原潤一〕

4c. 劇症肝炎—血漿交換療法の適応時期と方法 ——133
A 劇症肝炎と血漿交換 ……133
B 血漿交換の実際 ……134
1 適　応 ……134
2 開始時期 ……134
3 血漿分離法 ……134
4 膜分離法による血漿交換の実際 …135
C 劇症肝炎の中での血漿交換の適応 …137
D 症　例 ……137
1 救命例 ……137
2 非救命例 ……138
〔藤原研司，富谷智明〕

5. 新生児，小児の肝炎の治療ポイント ——140
A 狭義の新生児期の肝炎 ……140
1 治療方針 ……140
2 特異的治療—単純ヘルペスウイルスによる肝炎 ……140
B 新生児肝炎 ……140
1 薬物療法 ……141
2 一般的治療 ……142
3 予　後 ……142
C 急性肝炎 ……142
1 薬物療法 ……142
2 一般的治療 ……143
3 特殊療法 ……143
4 予　後 ……143
D 劇症肝炎 ……143
1 薬物療法 ……143
2 特殊療法 ……143
3 一般的治療 ……144
4 予　後 ……144
E 慢性肝炎 ……144
1 薬物療法 ……144
2 一般的治療 ……144
3 母児感染予防 ……144
〔白木和夫〕

V. 慢性肝炎の新しい薬物療法

1. 抗ウイルス剤 ——148
A インターフェロンの種類とその作用機構 ……148
B 抗ウイルス剤の治療効果の判定 ……149
C B型慢性肝炎でのインターフェロン療法 ……150
1 インターフェロン療法の適応基準とは何か ……150

[2] インターフェロンはB型慢性肝炎の治療薬として有用か ……151
[D] B型慢性肝炎での Ara-A 及び Ara-AMP 療法 ……154
[E] B型慢性肝炎での acyclovir(Zovirax®)療法 ……154
〔瀧野辰郎，奥野忠雄，進藤道子〕

2. 免疫調節剤 ――156
[A] 治療の目標 ……156
[B] 免疫賦活剤の作用機序 ……156
[C] 溶連菌製剤 OK-432 ……157
[1] 作用機序 ……157
[2] 投与成績 ……157
[3] 副作用 ……158
[D] cianidanol ……159
[1] 作用機序 ……159
[2] 投与成績 ……159
[3] 副作用 ……160
[E] トランスファーファクター ……160
[1] 作用機序 ……160
[2] 投与成績 ……160
[3] 副作用 ……161
[F] levamisole ……161
[1] 作用機序 ……161
[2] 投与成績 ……161
[3] 副作用 ……161
[G] インターロイキン2 ……161
[1] 作用機序 ……161
[2] 投与成績 ……162
[3] 副作用 ……162
〔谷内　昭，菅　充生〕

3. コルチコステロイド離脱療法 ――163
[A] コルチコステロイド離脱療法の原理 163
[B] 対象例の選択 ……164
[C] CS 剤投与法 ……165
[D] CS 剤離脱後の経過 ……167
[E] 適応除外例 ……167
[F] コルチコステロイド離脱療法の成績 167
[G] コルチコステロイド離脱療法の問題点 ……169
〔矢野右人〕

4. 漢 方 薬 ――171
[A] 漢方医学における診断と治療 ……171
[B] 「証」の陰陽分類 ……171
[1] 病気の部位についての区別―表裏 172
[2] 病気の性状についての区別―熱寒 172
[3] 病勢についての区別―実虚 ……172
[4] 陰　陽 ……172
[C] 薬剤の陰陽分類 ……173
[1] 温(熱)性薬 ……173
[2] 寒(涼)性薬 ……173
[3] 補性薬 ……173
[4] 瀉性薬 ……173
[D] 薬剤と証の陰陽分類補遺 ……173
[1] 燥　証 ……173
[2] 湿　証 ……173
[3] 升　証 ……173
[4] 降　証 ……173
[5] 散　証 ……173
[6] 収　証 ……173
[E] 慢性肝炎における漢方薬の選び方 …174
[F] 小柴胡湯及び茵蔯蒿湯の肝疾患に対する効果 ……174
[1] 小柴胡湯 ……175
[2] 茵蔯蒿湯 ……176
〔溝口靖紘〕

VI. 肝硬変合併症への対応

1. 出血傾向と DIC への対応 ――180
[A] 血液凝固因子測定の意義 ……180
[1] 肝における血液凝固因子生成のマーカーには HPT が役立つ ……180

[2] トロンビン出現の推定には HPT>PT が役立つ ……180
[3] プラスミン出現の推定にはフィブロネクチンが役立つ ……181
[B] 肝硬変の凝固線溶動態 ……181
[C] DIC の診断 ……182
[1] 血中 FDP 40 μg/ml 以上では DIC 合併を考える ……182
[2] DIC 合併の診断基準には HPT>PT と FDP 40 μg/ml 以上が役立つ …183
[D] 出血傾向の治療 ……185
[1] FDP 20 μg/ml 以下の場合 ……185
[2] FDP 40 μg/ml 以上の場合 ……185
〔佐藤俊一，柏原紀文〕

2. 消化管出血時(消化管障害)の一般的治療 ——187
[A] 出血程度の判定とショック対策 ……187
[B] 出血源の確認 ……187
[C] 出血源に対する治療 ……188
[1] 出血性胃炎 ……188
[2] 出血性胃・十二指腸潰瘍 ……191
[3] 食道静脈瘤出血 ……192
〔増山仁徳，石田基雄，原田　尚〕

3. 糖尿病の管理 ——193
[A] 肝硬変における耐糖能障害 ……193
[B] 1 次性糖尿病と肝硬変に伴う耐糖能障害の鑑別 ……194
[C] 代償期肝硬変に合併した糖尿病の治療 ……194
[1] 食事療法 ……194
[2] 運動療法 ……196
[3] 薬物療法—インスリン注射 ……196
[D] 非代償期肝硬変時の糖尿病の治療 …197
〔前沢秀憲，宮野龍美〕

4. 腎機能障害(いわゆる肝腎症候群)への対応 ——198
[A] 概　念 ……198
[B] 発生機序 ……198
[1] 腎外血流分布の変化による反応性攣縮 ……198
[2] 血管作動性物質の調節異常による腎皮質動脈攣縮 ……198
[C] 臨床症状及び診断 ……199
[D] 治　療 ……200
[1] 血管作動性薬物 ……200
[2] 特殊療法 ……202
[E] 腎不全の予防 ……204
[1] 一般的注意 ……204
[2] 感染症の合併 ……204
[3] 消化管出血 ……204
[4] エンドトキシン血症 ……204
[5] DIC ……204
[6] 腹水のコントロール ……204
〔辻井　正，植村正人〕

5. 中枢神経障害と昏睡への対応 ——206
[A] 肝硬変例でみられる中枢神経障害と昏睡 ……207
[B] 肝性脳症の早期診断 ……207
[C] 肝性脳症の予防 ……208
[1] 誘因除去 ……208
[2] 植物蛋白食 ……208
[3] 分枝鎖アミノ酸を主体にした肝疾患用の経口栄養剤と顆粒 ……209
[4] 骨格筋力の維持と向上 ……211
[5] 医原性高アンモニア血症の防止 …212
[D] 肝性脳症の治療 ……212
[1] 脳におけるアミノ酸・アミン・アンモニア代謝の是正—分枝鎖アミノ酸輸液剤 ……212
[2] 肝での尿素合成を促進し，骨格筋でのアンモニア処理能を高める—硫酸亜鉛 ……215
[3] 消化管の浄化—lactulose と抗生物質 ……215
[4] 尿中窒素の排泄を促進する—安息香酸ナトリウム ……217
[E] 急性肝不全症状を呈する例の治療と肝性脳症の外来管理法 ……217
〔渡辺明治〕

6. 腹水への対応 ―――――――――――220
A 腹水の鑑別 ……220
B 腹水の発生機序 ……220
1 Starling の法則による均衡のくずれ ……221
2 肝リンパ流出障害 ……221
3 2次的因子 ……221
C 腹水の治療 ……222
1 安　静 ……222
2 食　事 ……222
3 ナトリウム制限及び水分制限 ……222
4 利尿剤 ……223
5 アルブミン製剤 ……223
6 腹水穿刺 ……226
7 腹腔・内頸静脈シャント ……226
8 自己腹水濃縮再静注法 ……226
〔竹平安則，金井弘一〕

7. 食道静脈瘤破裂時の緊急処置 ―――227
A 循環不全に対する処置 ……227
B 門脈圧降下作用剤 ……228
C バルーンタンポナーデ法 ……229
D 内視鏡的硬化療法 ……232
E 手　術 ……235
F 経皮経肝的静脈瘤塞栓術 ……236
〔三條健昌，出月康夫〕

8. 門脈圧亢進症の薬物療法 ―――――238
A 薬　剤 ……238
1 propranolol ……238
2 metoprolol, acebutolol ……240
3 β_2-selective blocker ……240
4 prazosin ……240
5 nitroglycerin ……240
6 isosorbide dinitrate ……240
7 nifedipine ……241
8 verapamil ……241
9 spironolactone ……241
10 angiotensin II blocker (saralasin) ……241
〔奥村英正，大順賀勝〕

9. 食道静脈瘤に対する硬化療法 ―――244
A 適　応 ……244
B 手　技 ……247
C 成　績 ……248
1 救急例 ……248
2 待期・予防例 ……249
D 合併症 ……249
E 再　発 ……250
F 課題点 ……251
〔谷川久一，豊永　純〕

10. 食道静脈瘤に対する外科療法 ―――252
A 食道静脈瘤の治療 ……252
B 食道静脈瘤をきたす原疾患 ……254
C 直達手術の適応と術式の選択 ……255
D 経胸食道離断術(杉浦法)の2期分割手術 ……256
E 経胸食道離断術後の食道静脈瘤再発例の検討 ……257
F ICG 試験と手術適応 ……257
G Child 分類と手術成績 ……260
H 硬化療法後の直達手術及び食道再離断例 ……262
〔杉浦光雄，二川俊二〕

11. 脾機能亢進症に対する治療 ―――265
A 肝硬変症と脾機能亢進症 ……265
B 治療法 ……266
1 保存的治療 ……266
2 脾動脈結紮術 ……266
3 脾摘除術 ……267
4 脾動脈塞栓術(SAE) ……268
〔恩田昌彦，田尻　孝〕

VII. その他の慢性肝疾患の治療

1. アルコール性肝障害の治療と管理 —274
A アルコール性肝障害の病型 ……274
B アルコール性脂肪肝 ……275
1 臨床像 ……275
2 治療と管理 ……276
C アルコール性肝硬変 ……276
1 臨床像 ……276
2 治療と管理 ……278
3 肝性脳症とアルコール離脱症候群 279
D その他のアルコール性肝障害 ……279
E 内科領域での断酒療法 ……280
〔石井裕正，高橋久雄〕

2. 脂肪肝の治療 ——283
A 過栄養性脂肪肝治療の必要性 ……283
B 食事療法 ……284
1 絶食療法 ……284
2 半飢餓療法 ……284
3 減食療法 ……284
C 運動療法 ……286
D 心身医学的療法 ……287
E 薬物療法 ……287
〔関谷千尋〕

3. 体質性黄疸への対応 ——290
A 体質性黄疸の鑑別 ……290
B 黄疸に対する特殊療法 ……291
1 Crigler-Najjar 症候群 ……291
2 Gilbert 症候群 ……292
3 Dubin-Johnson 症候群 ……292
4 Rotor 症候群 ……293
C 薬　剤 ……293
1 phenobarbital ……293
2 bucolome (Paramidin®) ……294
3 glutethimide (Doriden®) ……294
D 合併症に対する処置 ……294
E 妊娠時の対応 ……295
〔黒田博之，吉田和朗，浪久利彦〕

4. 自己免疫性肝炎とその治療 ——296
A 自己免疫性肝炎の定義と病態など …296
1 定　義 ……296
2 病　態 ……296
3 重症度診断 ……297
B 自己免疫性肝炎の治療 ……298
1 副腎皮質ステロイドによる治療 …298
2 ステロイド以外の薬物治療 ……301
〔蓮村　靖，大宮司有一，武内重五郎〕

5. 原発性胆汁性肝硬変への対応 ——303
A 皮膚瘙痒感に対する治療 ……303
B 骨病変に対する治療 ……304
C 糖質コルチコイド ……304
D azathioprine ……305
E D-penicillamine ……305
F その他の薬剤治療 ……306
G 肝臓移植 ……307
〔佐々木博〕

6. 代謝性肝疾患の治療 ——309
A ヘモクロマトーシス ……309
1 瀉　血 ……309
2 鉄キレート剤 ……309
B Wilson 病 ……310
1 銅キレート剤 ……310
2 dimercaprol (Bal®) ……310
3 亜　鉛 ……310
4 血漿交換 ……311
5 食事療法 ……311
6 対症療法 ……311
7 肝移植 ……311
C アミロイドーシス ……311
1 dimethyl sulfoxide (DMSO) ……311
D ポルフィリン症 ……311
D-1. 晩発性皮膚ポルフィリン症 ……311
D-2. 急性間欠性ポルフィリン症 ……311
D-3. 造血性プロトポルフィリン症 …311

E　その他の代謝性肝障害 ……312
〔岡　博〕

VIII. 外科的肝疾患の治療

1. 肝外傷の治療ポイント ――――314
A　肝損傷の病態 ……314
1　肝損傷の機転，年齢，性，部位 …314
2　型分類と頻度 ……314
3　合併損傷 ……314
B　診　断 ……315
1　hypovolemic shock ……315
2　理学的所見と血液生化学検査 ……315
3　腹腔穿刺，洗浄 ……316
4　腹部X線像 ……316
5　超音波エコー ……317
6　CT ……317
7　肝動脈造影 ……317
8　血液検査，生化学的検査 ……317
C　治療の要点 ……318
1　保存的治療か手術的治療か ……318
2　手術的治療法 ……318
D　術後合併症 ……320
〔内野純一，円谷敏彦，佐藤直樹〕

2a. 化膿性肝膿瘍 ――――322
A　病原菌，分類，感染経路 ……322
B　胆管炎性肝膿瘍 ……322
1　臨床症状 ……322
2　診　断 ……323
3　画像診断 ……323
4　他の肝膿瘍との鑑別診断 ……324
5　治　療 ……324
C　非胆管炎性肝膿瘍 ……325
1　臨床症状，所見 ……325
2　診　断 ……325
3　画像診断 ……325
4　治　療 ……327
〔高田忠敬〕

2b. アメーバ性肝膿瘍 ――――328
A　赤痢アメーバ症の変貌 ……328
B　疫　学 ……328
C　臨床症状 ……328
1　自覚症状 ……328
2　他覚的所見 ……329
3　臨床検査 ……329
4　画像診断 ……329
D　診　断 ……330
E　治　療 ……330
1　内科的治療法 ……330
2　外科的治療法 ……331
3　合併症に対する治療法 ……332
〔田中　慧，林　星舟〕

3. 肝良性腫瘍の手術適応 ――――333
A　肝細胞腺腫(LCA) ……333
B　限局性結節性過形成(FNH) ……334
C　肝血管腫 ……335
D　肝嚢胞 ……337
E　その他の肝良性腫瘍 ……340
〔土屋凉一，瀬川　徹〕

4a. 肝悪性腫瘍―治療の選択 ――――341
A　肝硬変合併 ……341
B　根治切除 ……342
C　切除術兼塞栓術 ……344
D　術後(残肝)再発 ……345
E　切除不能症例に対する塞栓術 ……345
F　塞栓術の変法 ……346
G　肝動脈内制癌剤 one shot 注入法 …346
H　肝動脈内制癌剤持続注入療法
(持続肝動注) ……346
I　超音波ガイド下エタノール注入療法
(エタノール局注) ……346
J　全身化学療法 ……347
〔小林健一，服部　信〕

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com